

令和 6 年 4 月 27 日現在

機関番号：33906

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14094

研究課題名（和文）校内授業研究会の事例をジョイント・アテンションに着目して分析するための基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research for analyzing cases of school-based lesson study groups with a focus on joint attention

研究代表者

古市 直樹（Furuichi, Naoki）

椋山女学園大学・教育学部・准教授

研究者番号：00823882

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、校内授業研究会の事例をジョイント・アテンション（以下JA）に着目して検討するための理論的な枠組みを明らかにすることであった。ある事例におけるJAの機能の具体的な仕組みを解明し、その後、全ての事例を分析して事例の類型化に基づき授業研究会中のJAの一般的機能を解明した。そして、そのような一般的機能を有するJAが授業研究会の事例研究の概念装置としてどのような限界を有しているか、理論的検討の成果に照らして考察した。それに基づき、今回の作業仮説（JAを認識するための既存の理論的な枠組み）を校内授業研究会の事例研究に適したものと再構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教師の視線がどこを向いているかをアイトラッキングによって記録する試みでは行われていなかった、カメラで観察された現象を構造化する（理解する）ための理論的な枠組みの整備や、共同行為における注視についての検討、注視と周囲との影響し合いについての検討を本研究では試みた。また、教師自身が空間にどのように関心を向けているかについては、「位置どり」等の「空間使用」に関する教師の「空間教育学」を明らかにした研究も参考になるが、本研究は、そのような「空間教育学」自体が授業研究会という共同行為において協同的に構築される過程を解明することにも寄与する。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to identify a theoretical framework for examining cases of school-based lesson study groups with a focus on joint attention (hereafter JA). The specific mechanism of the JA function in a particular case was clarified, and then all the cases were analyzed to clarify the general function of JA during the lesson study group meetings based on the typology of the cases. Then, in light of the results of the theoretical study, we examined what limitations JA with such general functions had as a conceptual device for case studies of lesson study groups and how it should be modified. Based on this, the present working hypothesis (a pre-existing theoretical framework for recognizing JA) was restructured as suitable for case studies of school-based lesson study groups.

研究分野：教育方法学

キーワード：授業研究

## 1. 研究開始当初の背景

校内授業研究会の事例を参加者の発話内容の生成過程に着目して検討する例は既に多く、また、授業研究会後に残った筆記内容も考慮されてきたが、一方で、授業研究会中の筆記内容の生成過程、ましてや授業研究会中の会話や読み書きという行為の生成過程は殆ど扱われていない。ICTの発展と普及に伴って今日では、物理的な学校の教育上の意味や必要性和一体的に、物理的な学校現場における教師たちの学びや育ちの意味や必要性も問い直されるであろう。そのため、校内授業研究会等の事例も、実際の行為の生成過程にまで着目して精緻に検討されなければならない。教師教育は校内授業研究会における実際の具体的な行為(いわゆる身体行為)としてはどのように生成しているのか、また、どのように生成していると効果的であるのか。

そもそも教師の認識や思考や身体や行為のどのような変化が教師の学びや育ちであるといえるのか、また、教師の学びや育ちの質はどのように評価されるのかを明らかにしておくことも必要であるが、これについては、教員研修と教員評価とに関する先行研究が参考になる。また、まずはコーチングや反省的实践に関する自身の既刊の論考を基本とすることができる。しかし、校内授業研究会等の事例を実際の行為の生成過程にまで着目して精緻に検討するためには、会話や読み書きという授業研究会中の主要な行為の生成過程を扱わなければならない、前述の通り、先行研究には類例が殆どない。

会話や読み書きは授業中の主要な行為でもある。申請者自身によるこれまでの研究では、授業中のジョイント・アテンション(以下 JA)に着目すると授業中の発話内容や筆記内容の生成過程と会話や読み書きの生成過程とが一体として検討されうるということが実証された。よって、校内授業研究会等の事例を前述のように精緻に検討するためにも JA という概念装置を利用することができると予想された。JA とは、コミュニケーションにおける複数個体の注意ないし注視の連鎖的生起であり、特に、二者が同じ物を連鎖的に注視することである。ここで「二者」には、一個体と集団という二者、集団と集団という二者も含まれる。本研究課題の核心をなす学術的な「問い」は、校内授業研究会の事例を JA に着目して検討するための理論的な枠組みとはどのようなものかということであった。

教師たちの校内授業研究会は、授業にもまして、小さな空間において立ち歩きせずに座ったまま主に会話として行われるので、動線分析等のように立ち歩き等の身体の大きな動きのみを扱う行為分析では検討されない。実際、教師たちの校内授業研究会の事例は、前述のようにこれまでは主に発話内容の分析によって検討されてきた。しかし、会話という共同行為そのもの、しかも読み書きや授業映像の視聴までもが組み込まれた多面的な共同行為そのものとしては、精緻に検討されてこなかった。本研究は、教師たちの校内授業研究会の事例を、教師たちの様々な見るといふ行為や示すという行為に着目して検討することを可能にし、教師たちの校内授業研究会に関する学術的研究における上記のような状況を克服することに寄与するであろうと考えた。

JA が授業の実証的検討と授業研究会の実証的検討との共通の概念装置になれば、授業と授業研究会との往還を、また、そこにおける教師たちの学びや育ちを精緻に検討することも可能になる。例えば、授業で用いられた教材が授業研究会にも資料として持ち込まれるならば、その教材は授業と授業研究会とに共通する JA 対象として、授業の内と外とを媒介する重要な契機となる。また、例えば「学びの共同体」や「授業カンファレンス」としての授業研究会は、授業の映像記録への様々な JA から成り立っているものとして微視的に分析されうる。授業という様々な JA からなるもの自体が、様々な JA の対象になるということである。更に、授業研究会の記憶はその後の授業における教師の思考にも組み込まれているので、結局、教師による実践と省察との一体性や同一性が重層性として微視的に分析されうると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、校内授業研究会の事例を JA に着目して検討するための理論的な枠組みを明らかにすることであった。

## 3. 研究の方法

### (1)文献等に基づく理論的検討

校内授業研究会の事例を JA に着目して検討するための基礎として、まず校内授業研究会に関する理論的検討を行った。「研修」や「養成」や「授業研究(lesson study)」や「教材研究」をはじめとした教師教育に関わる諸概念を整理した。そして、教員研修に関する先行研究、特に教師たちの校内授業研究会をはじめとする校内研修に関する先行研究を検討した。また、そのための視座となるよう、まずは、教師の学びや育ちの質を評価するための根本的な観点を、臨床教育学的知見やコーチング概念等にも着目して考察し明確にした。

## (2)事例検討のための調査

調査対象校において、教職員に研究内容と調査内容を伝え、当該校の状況について校長や教頭や研究主任に聴き取りを行うとともに、観察と記録の承諾の得られた校内授業研究会の場面およびそこで扱われる授業場面を観察し記録した。

また、本研究で授業研究会の事例をJAに着目して分析する上で、JAを認識するための理論的な枠組みの作業仮説（叩き台）となったものは、授業や小集団学習の事例をJAに着目して分析した際に構築した枠組みである。特に2016年『日本教育工学会論文誌』掲載論文と2017年『質的心理学研究』掲載論文に倣った。まず、JAは見るという行為と示すという行為とからなる共同行為として認識される。示すという行為は特定の物を相手に注視させるための行為であるが、これは、物の位置関係、特に、示す相手・示す者・示される物という三者の位置関係に基づき showing や presenting や pointing という具体的な行為として考えられる。showing は自身の手元で示すという行為、presenting は相手の手元で示すという行為である。pointing は指すという行為、即ち特定の物を相手に注視させるためにそれに他の物（の先）を向けることである。

カメラ等の設置・操作方法や、JAおよびJA対象の特定方法等も上述の理論的な枠組みに含まれている。例えば、室内全体を撮るカメラではパンニングもズーミングも行わなかったが、近くの参加者の手元全体を撮るカメラでは、その参加者が筆記をひと通り終えた様子でいる時にはその筆記内容をズームで撮った。

## (3)事例検討、理論的省察

授業研究会の事例研究におけるJAという概念装置の特徴や特長が表れやすい事例を選んで分析した。具体的には、授業映像を共同注視しながら行う授業研究会の事例や、小集団で手元の資料を共同注視しながら行う授業研究会の事例を分析した。また、多様なJA（JAにおける多様な当事者、注視対象）やJA間の多様な関係（多様な差異、同一性、因果性）を見出せるよう、全体での会話の生成過程の中でも特にJAが連続して生じる場面を事例として抽出し分析した。例えば、コの字型では、系統的な伝達や教示と協同的な省察とが両立することもあり、ホワイトボードやスクリーン等を用いた説明等の合間に全体での会話が始まって参加者たちの顔の向きに次々に変化が生じれば、そのような場面を、JAが連続して生じた場面とみなすことができた。

上記の事例分析の結果について考察を行い、当該事例においてJAがどのような仕組みでどのように機能しているかという構造を解明した。JAやJAを構成する諸行為は、位置関係に基づく類型によりコミュニケーションと注視対象との関係性として理解されるため、考察の重点は、位置関係や位置関係に基づく行為類型から、コミュニケーションと注視対象との関係性へと、なおかつJA概念に関する総合的な内容へと移行していった。このことを反映する幾つかの小見出しを事例の叙述（事例分析の結果）に即して順次設けて考察を行った。

その後、全ての事例を分析して、事例の類型化に基づき授業研究会中のJAの一般的機能を実証的に解明した。そして、そのような一般的機能を有するJAが授業研究会の事例研究の概念装置としてどのような限界を有していてどのように改められるべきかを、理論的検討の成果に照らして考察した。それに基づき、今回の作業仮説を、即ちJAを認識するための既有的理論的な枠組み（データ取得方法を含む）を、校内授業研究会の事例研究に適したものと再構築した。つまり、校内授業研究会の事例をJAに着目して検討するための理論的な枠組みが明らかになった。研究の成果を幾つかの学術論文として学会誌に投稿し査読を受けているところである。

## 4. 研究成果

授業研究会の事例を参加者の注視に着目して分析するという試みは殆どないが、授業中や授業映像の再生中に教師がどこを注視しているかをアイトラッキングカメラによって記録する試みはある。これは、教師の注視と教室空間全体のありようとの関係を検討する上で参照すべき重要な成果である。しかし、そこでは基本的に映像記録の方法の開発に重点が置かれており、カメラで観察された現象を構造化する（理解する）ための理論的な枠組みが整備されていない。また、教師の注視が教師の関心の表れとして扱われているものの、注視が周囲とどう影響し合うかは問題とされていない。授業や授業研究会が会話という共同行為であることからすると、授業や授業研究会の実態を探究するためには、空間の生成を共同行為の生成として考えなければならないので、本研究のように、注視も共同行為の中に見出されなければならないであろう。

また、教師自身が空間にどのように関心を向けているかについては、「位置どり（positioning）」等の「空間使用」に関する教師の「空間教育学（spatial pedagogy）」を明らかにした研究が参考になる。本研究は、そのような「空間教育学」自体が授業研究会という共同行為において協同的に構築される過程を解明することにも寄与するであろう。本研究では、調査対象校において、教師たちの協同的な教育実践におけるJAによる空間認識について考察する上で有益なデータを収集することもできた。子どもたちと教師たちがどのように学校空間全体を活動的でダイナミックな学びの空間として協同的にデザインするかを観察と記録に基づき検討することもできた。

校内授業研究会の事例をJAに着目して検討するための理論的検討では、まず、校内授業研究会をめぐる問題圏を構成する幾つかの主題についても理論的な整理を行った。例えば、学習

環境論、授業と教材とカリキュラムの組織的な研究やデザインの諸相、教師たちによる実践的研究の基礎となる認識論や科学論についても整理した。校内研修に関する先行研究で扱われている近年の校内授業研究会の幾つかの形態を想定しながら行った。教材概念の諸相や、アプロプリエーション論、社会的アフォーダンス論、行為論についても再検討を行い、音声言語と文字言語との関係性、会話と読み書きとの関係性を分析する上でどのような理論的な枠組みが妥当であるかを再考した。前述の通り、教師の思考や判断や省察について教師の注視や視線に着目して実証的に検討している諸々の先行研究の成果を本研究に活用できないかも検討した。そして、JA という概念そのものについても、あらためてマイケル・トマセロなどの文献に基づいて整理をした上で、JA が校内授業研究会の中でどのような文脈においてどのように機能しているのかについて校内授業研究会の幾つかの形態を想定して作業仮説を吟味した。

調査対象校における授業研究会を支えている学習理論あるいは理論的・実践的背景についても、研究主任等から可能な限り詳細に聴き取って教育方法学等における最新の研究動向にも照らしながら把握し、考察におけるひとつの視点とした。学習指導要領の改訂の動向に鑑みて考えられる問題や課題からも、まず、あらためて明確に「協同学習 (collaborative learning)」の哲学を教育実践に関する諸論考の基礎に据えることの重要性を導き出した。「協同学習」の哲学は「協力学習 (cooperative learning)」の理論と対照されるものであるが、両者はしばしば混同される。本研究では、知識や学びやカリキュラムや教材や教師のあり方を、あるいはそれらがどうあるべきかを「協同学習」の哲学に基づいて理解し、教育実践に関する示唆を得た。具体的には、教師自身の学びに関して、校内授業研究会における会話生成を微視的に分析することの必要性が示された。

実践的・協同的・省察的であるという過程の性質が学校現場における教師たちの授業研究やそれに基づくカリキュラム・マネジメントを特徴づけるからこそ、まず過程の質が精緻に検討されなければならない。そして、校内授業研究会では、思考を授業における事実や現実と絶えず「戻す」「つなぎ直す」ために会話における授業映像や教材等への共同注視が必要である。校内授業研究会における会話生成を質的に精緻に検討するためにも、また、それを特に授業映像や教材等への共同注視に着目して行うためにも、校内授業研究会の事例を JA に着目して微視的に分析することが重要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 古市直樹	4. 巻 第81号
2. 論文標題 校内授業研究会における会話生成の微視的分析の必要性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高知大学教育学部研究報告	6. 最初と最後の頁 85-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------